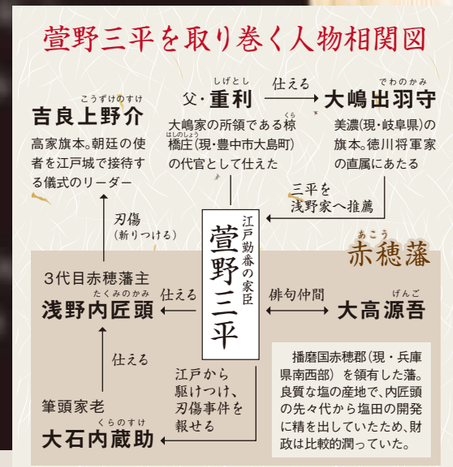
萱野三平

時は元禄。幕藩体制が整い、絢爛たる文化が芽生えた華やかな時代に、若干27歳で悲運の生涯を閉じた一人の武士がいる。名を萱野重実、通称三平。摂津国萱野郷（現・箕面市萱野）に生まれ、同地で果てた赤穂浪士だ。

忠孝の狭間で貫いた、武士の一分――

『萱野三平記念館（涓泉亭）』にある三平像

萱野三平を取り巻く人物相関図



Q 三平はなぜ赤穂藩に？

父・重利の主人である大嶋出羽守が、播州赤穂の浅野家に、三平のことを召しかかえるよう勧めたため。赤穂藩が江戸に構えていた屋敷で、中小姓として仕えることとなった（江戸勤番）。

Q どのような身分だった？

中小姓とは、侍と足軽の中間に位置する下級武士。殿様が乗っている馬の手入れなど、日常的な雑務を担当していたとされる。

Q 赤穂藩の中で、誰と仲が良かった？

江戸を中心に、全国的に俳諧がブームになっていた時代。特に、江戸俳壇の中心的人物であった水間沾徳に弟子入りしていた三平は、同じく門下生であった大高源吾、神崎與五郎と親しくしていたようである。

満身創痍で報せた藩の一大事 三平の運命も、ここから動き出す

江戸を発ち、宿場ごとに人足を入れ替え、休むことなく走る早駕籠。中には2人の赤穂藩士が乗っており、国元・赤穂へと急ぐ。距離にして約620㎞、通常10日以上かかる道のりを、わずか4日半で駆け抜けた。まだ夜が明けきらぬ午前4時、赤穂に辿り着いた2人は疲労困憊の最中、藩の筆頭家老・大石内蔵助に〝御家の一大事〟を伝えた。この報せを届けた藩士の一人こそ、萱野三平である。

赤穂藩の一大事とは「赤穂事件」の発端である、藩主・浅野内匠頭が及んだ刃傷。江戸で勅使饗応役、つまり朝廷の使者を接待する役目にあたっていた内匠頭が、その儀式全般を司る高家筆頭・吉良上野介を斬りつけたのだ。儀式の直前、『江戸城』松之大廊下での出来事であった。将軍の居所である殿中での刃傷は死罪と決まっていたが、よりにもよって幕府にとって大切な儀式の日。激高した5代将軍・綱吉は内匠頭に即日切腹、さらには〝御家御取潰〟を言い渡す。一方で吉良はお咎めなし。この時代、武士の間では「喧嘩両成敗」が定法であったが、吉良が刀を抜いていなかったため、内匠頭の一方的な暴力とみなしたのではないか、というのが一説である。しかし、幕府が下したこの判断には三平含め、江戸での2人の様子を知る家臣たちが「あれは喧嘩だ」、「賄賂を拒んだ殿に対して、吉良は嫌がらせを…」と、憤慨した。

1930年（昭和5年）から、三平の働きを伝え残すために行われていた「三平祭」の様子。藩の一大事を、早駕籠に乗って届けた三平にちなみ、青年会が早駕籠競争をしていた（箕面市行政史料）

散り散りになる赤穂藩。仇討ちを誓う三平も、一度故郷へ

藩主・内匠頭の切腹に加えて、幕府から言い渡された〝御家御取潰〟とは、城を明け渡すということであり、約300人の赤穂藩士が路頭に迷うことを意味する。これには、「吉良が生きているのにすんなりと城を明け渡すことはできない」と、城に籠って抵抗する〝籠城〟や、吉良への仇討ちの強行、城の前での切腹など、さまざまな意見が飛び交った。一方で、藩としては浅野家を立てるべきであるという意見も。最終判断に迫られた大石内蔵助は、内匠頭の弟にあたる浅野大学を擁立して〝御家再興〟を目指すとした。つまり、城は明け渡すが、浅野家親戚一同で吉良の処分を幕府に訴えることで、赤穂藩の再出発を果たそうというもの。藩士たちはやむなく各地へ散り散りに。三平は故郷の萱野へと帰ることにした。

仇討ちに対して血気盛んであった三平が故郷へ帰ったのには1つ、大きな理由が挙げられる。母・小まんの供養である。刃傷事件の日、早駕籠に乗って赤穂へ向かっていた道中、西国街道沿いの自邸前を通りかかった三平は、偶然にも小まんの葬式に出くわす。同行していた早水藤左衛門に「一目会って行け」と勧められるも、涙ながらに「御家の一大事」と、駕籠から降りることなく母への思いを振り切っていたのだ。そんな主君と親、忠義と孝行の狭間で揺れ動く出来事は再び、三平の身に降りかかる。

主君への忠義か親への孝行か…苦悩の末、選んだのは自刃の道

〝御家再興〟に望みをかけて一時解散した赤穂藩だが、大石内蔵助を中心に、吉良への仇討ちを誓った者たちは血判状を書いており、三平もそこに名を連ねていた。「同志とともに主君の無念を晴らしたい」。三平の想いは日に日に募り、遂には江戸に東上することを父・重利に願い出る。しかし、三平を浅野家へ紹介してくれた大嶋家に迷惑が及ぶことを案じた重利は、その願いを聞き入れることはなかった。主君への忠義心と親を裏切ることはできないという思いの狭間で苦しみ抜いた三平は、主君の月命日にあたる1702年1月14日、自宅長屋門の一室で腹を切り、27年の生涯に幕を閉じた。その後、浅野家〝御家再興〟の望みが絶たれると、47人の赤穂浪士が吉良邸への討入りを決行。三平の死から11カ月後に本懐を遂げた。主君の死からはおよそ1年9カ月越しのことであった。大石内蔵助は「三平が生きていたならば、当然この一挙に加わっている忠義の者」と語っていたそうだ。

三平には、主君に忠実な武士としての一面の他に、優れた俳句を残した俳人・涓泉としての一面もあった。同じ赤穂浪士で俳句仲間の大高源吾とは『勝尾寺』、『瀧安寺』で句を交わした記録も残っている。文化人としての才を持つも、儚く散る運命を辿った三平。その終焉の日が、もうまもなく巡ってくる。主君を思い、親を思うが故の最期に詠んだ辞世の句をはじめ、この地に伝え残されてきた〝生きた証〟に触れて、思いを馳せたい。

赤穂事件が運命を分けた萱野三平の生涯

赤穂藩・時代の動き

- **2月4日** 内匠頭、老中から勅使饗応役に任命される
- **3月14日（赤穂事件の発端）** 松之大廊下において浅野内匠頭、吉良上野介に**刃傷**
- **3月14日 夕刻** 内匠頭の罪科が決まり、切腹（亨年35歳）
- **3月19日 未明** 第一報が赤穂に到着。夜には、内匠頭の切腹と御家御取潰を知らせる第二報が到着
- **4月19日** 『赤穂城』明け渡し
- **8月14日** 京都紫野『瑞光院』にて、亡内匠頭の追善供養を行う
- **1月14日** 同志、会議中に三平自刃の報せを受ける
- **12月14日 夜半** 同志三カ所に集まり武装。明け方、吉良邸に**討入り**、上野介の首をとる
- **2月4日（赤穂事件の終幕）** 大石内蔵助ら一同切腹

1675年（延宝3年）／1680年（延宝8年）／1687年（貞享4年）／1701年（元禄14年）／1702年（元禄15年）／1703年（元禄16年）

萱野三平の動き

- 浅野長矩（9歳）が父・長直から跡目相続。播州赤穂藩第3代藩主・内匠頭となる
- 徳川綱吉が5代将軍となる
- 摂津国萱野郷（現・箕面市萱野）に誕生
- 播州赤穂藩主・浅野内匠頭に中小姓として仕官（13歳）
- **3月14日 午後** 刃傷事件を国元・赤穂に報せるべく、早水藤左衛門と共に早駕籠で出発
- **4月下旬** 萱野郷自邸に帰る
- **8月14日** 追善供養に参列
- **9月中旬** 大高源吾が三平を訪問
- **1月14日 未明** 自宅居間にて**自刃**する（亨年27歳）

※日付は全て旧暦

三平（俳号：涓泉）の辞世の句を解説

晴れゆくや
日ごろ心の
花曇り

「無念の死を遂げた主君・内匠頭への日頃からの思いを果たせず痛恨の極み。殿の後を追う我が身だが、きっといつか晴れやかな桜の花が咲くことだろう」。三平の厚い忠義心が感じられる句である。

解）箕面市民俳句会 顧問 **熊野禮助**さん

▶『萱野三平記念館』にある辞世の句碑

取材協力

萱野三平記念館（涓泉亭）

住所／箕面市萱野3-10-4
時間／10:00～17:00
※最終入場16:30まで
休み／月曜　※12/28～1/4は休
駐車場／3台 ※中型以上は駐車不可
入場料無料　☎072-724-7201

三平が自刃したと伝えられる「旧邸長屋門」と管理棟「涓泉亭」からなる記念館。長屋門は1973年に「大阪府指定史跡」となった。「涓泉亭」には、三平に関する資料が並び、句会や茶会で利用できる和室も完備。（※和室の利用は左記まで事前申請を）

箕面市立郷土資料館

住所／箕面市箕面6-3-1
☎072-723-2235

文／竹鼻利恵　デザイン／松浦愛梨　写真／西谷月彦